

聖家族ステンドグラスのエピソード ～結婚式と葬儀～

聖心会の水戸教会で15代主任司祭を務めておられた小林師（昭和59年頃）のことです。ある日の婦人会の清掃日に、教会を訪れると、聖堂の両側の通路と中央通路に、美しく花が並べられていました。私は「今日は結婚式の予定はなかったはずだけれど……」と不思議に思っていたところ、正装した花婿と花嫁が聖堂に入ってきました。「本日、結婚式をお願いしていた〇〇です。よろしくお祈りします」と挨拶され、私たちは驚いてしまいました。何人かで急いで司祭館へ行き、小林師に事情を説明すると、お二人は、「ここは五軒町の教会ですね。私たちはこの後も予定があるので、式を挙げていただけませんか」と懇願されました。困惑されているお二人の様子に、私たちも気持ちを動かされ、「ぜひ、式を挙げてあげてください」と口をそろえました。師は「それでは司祭館へいらっしゃい。結婚についてお話ししましょう」とお二人を迎えました。しばらくして聖堂に戻ってきたお二人は、ステンドグラスの前で誓いの言葉を交わし、小林師の祝福を受けて署名を済ませた後、教会をあとにして宴会場へと向かわれました。思いがけない展開に私たちは驚きつつも、善意に導かれるようにその日を過ごしました。お二人がもともと申し込んでいた教会の司式の方や参列者は、さぞかし戸惑ったことと思います。今、その方々がどうされているかはわかりませんが、あの出来事はまるで神様のちょっとしたいたずらのようでした。あの日、ステンドグラスのやさしい光は、変わらず静かに聖堂を照らしていました。

また、同じ頃のことです。婦人会の清掃中に、聖堂の玄関前で二人の中年の女性に声をかけられました。「ここに、丸い絵のステンドグラスがありますか？」「ありますよ。どうぞ中へお入りください」と案内すると、二人はすぐにその絵を見つけて声を上げました。「これだ！お父さんが言った通りの絵だ。よかった……」お父様は

今、最期の時を迎えておられ、「自分が亡くなったら、あの丸いステンドグラスのある教会で葬儀をしてほしい」と繰り返し話されていたそうです。娘さんたちはその願いを叶えるために探し続け、ようやくこの教会にたどり着いたのでした。私はすぐに司祭館へ行き、小林師に事情を伝えました。師は「大丈夫。よろしいですよ」と快く応じてくださり、その後、無事に葬儀が執り行われました。数日後、女性たちが再び教会を訪れ、お父様の最期の様子を伝えてくれました。「とても安らかな臨終でした」その言葉に、神の計り知れない慈しみと聖霊の導きを感じ、深く感謝する一日となりました。



この丸窓のステンドグラスは、昭和24年に来日された水戸教会第七代主任、ローレンス・クレーグ師が発案されたものです。昭和25年頃、師は私の夫・信一に原画の制作を依頼しました。円窓の構想にはかなり苦勞したようで、夫は祈りを重ね、聖霊の導きを求めながら、長い時間をかけて取り組んでいました。特に、陽の光の差し込み方には強くこだわり、色づかいにも心を配っていたようです。彼には、「差し込む光を通して、見る人の心に神の愛と慈しみが届き、一人ひとりが恵みに包まれて安らぎを得られるように」との想いがありました。神に、栄光と感謝を捧げます。

【典礼部より】

5月は聖母月ですので、例年通りミサ後、庭のマリア様の御像の前（雨天時は御聖堂の中）で、ロザリオの祈りを唱えます。アヴェ・マリアの祈りは5回ずつ唱えます。玄義は下記の通りとなります。

4日（日）	喜びの神秘
11日（日）	光の神秘
18日（日）	苦しみの神秘
25日（日）	栄えの神秘

【編集後記】

†主の平安
母との夕食が当たり前だと

思っていた時は過ぎ去り、親交（コミュニケーション）の大切さを実感する毎日です。暫くお休みを頂いておりました「サグラダ・ファミリア」がこの聖なる時に復活できることを神様に感謝いたします。復活した教会報サグラダ・ファミリアが皆さん聖家族の「絆」となりますことをこころより祈念いたします。今後とも宜しくお祈り申し上げます。

サグラダ ファミリア

Sagrada Familia
復活号
2025年第1号

発行日
4月20日（日）
発行所
水戸教会広報部
メールアドレス
Info@catholic-mito.com
広報部サイト
<https://catholic-mito.com/>

編集
水戸教会広報部

カトリック水戸教会 会報 復活号

サグラダ ファミリア

Sagrada Familia — 聖家族 —

2025年4月20日発行

〒310-0063 水戸市五軒町2-4-37

Tel:(029)221-3976/Fax.226-7661

「わたしはよみがえりであり、いのちです。」

水戸教会の皆様
ハッピーイースター！

キリストはよみがえられました！アレルヤ！この嬉しい言葉が、今日、私たちの心と教会にあふれています。イースターは、私たちの信仰において、一番大切なお祝いです。イエス様は、私たちのために苦しみ、十字架上で亡くなりましたが、死からよみがえられました。イエス様は今も生きておられます。ですから、私たちも新しい命をいただけます。

聖パウロはこう言いました。「もしキリストがよみがえられなかったなら、私たちの教えも、あなたがたの信仰もむだです」（コリントの信徒への手紙一 15:14。）でも、キリストは本当によみがえられたのです。これこそ、今日、私たちが喜んで祝う素晴らしい知らせです！

2025年は「希望の巡礼者」というテーマの聖年です。今年のイースターの喜びは、このテーマによってさらに大きく感じます。私たちはみな、神様を信じながら、希望をもって、いっしょに歩む旅をしています。辛いこともあります。イースターは「闇の後には、光が来る」と教えてくれます。

このイースターの希望を、家族や教会、地域の人たちに伝えましょう。親切やゆるし、思いやりをもって、神様の愛をあらわしましょう。

イエス様は言いました。「わたしはよみがえりであり、いのちです。わたしを信じる人は、死んでも生きるのです」（ヨハネによる福音書 11:25）この言葉は、私たちに勇気を与えてくれます。

このイースターが、皆様の心を平和で満たし、神様への信頼を新しくしてくれますように。希望の巡礼者として、よみがえられた主の光の中を、いっしょに歩いていきましょう。

キリストの愛と祝福をこめて

主任司祭
ペトルス・アド ベララウエ（ルスニ神父）



『復活祭』によせて ～グスタフ・マーラーの「復活」～



ドイツ・後期ロマン派を代表する作曲家、グスタフ・マーラー (Mahler, Gustav 1860-1911 オーストリア)は、生涯に10曲の交響曲を作曲していますが、そのうちの第2番には、『復活』という表題がつけられています。

もともとこの曲は、彼の友人であるハンス・フォン・ビューローの死をきっかけに作られ、最初は『葬礼』という題がつけられていました。

しかし、そのビューローが亡くなり、その葬儀に参列した際に、フリードリッヒ・クロプシュトック(1724-1803)の讚美歌『復活』がオルガン伴奏で歌われるのを耳にしました。

この讚美歌は彼にとって、神からの啓示のように思われたようです。彼には、人の死は「よみがえり」であり、「不死の生」にいたるものと考えられたようです。

その結果、この讚美歌『復活』を最終楽章にすえた交響曲が作曲されたのです。

クロプシュトックの讚美歌『復活』の歌詞はおおよそ次のようなものです。

よみがえる、そうだ、
おまえはよみがえるのだ、
わたしの塵(ちり)よ。
ほんの短い休息のあとで。
おまえを呼んだ不死の生が
おまえに与えられるであろう。
種として蒔かれたおまえは、
ふたたび花を咲かせるだろう。
収穫の神が歩いてきて、

死んだ私たちを一つの束に拾い集める。
おお、信ぜよ、私の心よ、
おまえは何も失うことはない。
おまえのものは存在している。
おまえがあこがれたものは、
おまえのものだ。
おまえが愛したものは、
戦いとったものはおまえのものだ。
おお、信ぜよ。
おまえは理由があったから生まれたものだ。
おまえは、理由があればこそ生き、
苦しみに耐えるのだ。
生れ出たものは消え失せねばならない。
消え失せたものはよみがえるのだ。
おののきふるえるのをやめよ。
備えよ、生きるために備えよ。
おお、苦しみよ。
おまえはすべてにいきわたるもの。
私はおまえをもぎとって逃げてきた。
おお、死よ。
おまえはすべてを征服するもの。
いまこそおまえが征服されたのだ。
私は自分で勝ち取った翼を広げ、
愛の望みを抱きながら飛び去るであろう。
いかなる瞳も向けられぬ
まばゆい光に向かって。
私は、生きるためにこそ死ぬのだ。
よみがえる、
そうだ、おまえはよみがえるだろう。
私の心よ。一瞬のうちに。
おまえが戦い取ったものが
おまえを神のもとへ運ぶだろう。

復活祭を迎えたこの季節に、この名曲を味わってみるのはいかがでしょうか。

お知らせ

※転出・転入等の個人情報は個人情報保護のため削除させていただきます。



隔週金曜日のミサ後、カトリックの教えを深めたい方、洗礼を受けている方の学び直し、またキリスト教入門のための勉強会を始めます。

本は『「信仰の世界」へのエクソダス』を使いますので、〇〇〇までお申込みください。
※個人名は削除させていただきます。

■聖歌のあじわい『希望の巡礼者～2025年「聖年」の賛歌～』



聖年の公式賛歌『希望の巡礼者』。主日ミサの選曲をしてくださるオルガニストさんたちのおかげで歌う機会が多く、みなさんも覚えてきたのではないのでしょうか。5月11日の聖年ミサでも歌う予定になっています。

この聖歌の原題は“Pellegrini di Speranza” (ペレグリーニ・ディ・スペランツァ)、直訳すれば「希望の巡礼者たち」(Pellegriniは複数形なので)ということになりますか。作詞はピエランジェロ・セケリ師 (Msgr. Pierangelo Sequeri)、神学者であり作家・音楽家、教皇様の腹心の一人です。私たちが歌っている日本語版は、日本カトリック司教協議会の訳詞によるものです。

ヴァチカンの聖年公式サイトには「創造、兄弟愛、神の優しさ、そして目的地への希望という(この聖歌の)テーマは、内容や言い方において神学的ではあるものの、『技術的には』神学ではない言語で響き渡り、現代の私たちの耳に雄弁に語りかけます(イタリア語版から筆者翻訳)」と書かれています。

「『技術的には』神学ではない言語」とあるのは、原詞が神学的な教会ラテン語ではなく、現代イタリア語で書かれているからです。そこで、辞書と機械翻訳だよりで原詞の意味をたどってみました。紙面の都合で完全な対訳は掲載できませんが、こめられた想い、訳詞の苦勞などが想像できる部分を紹介します。

私たちが「希望の光、神よ、」と歌う答唱の最初は、原詞では“Fiamma viva della mia speranza” (私の希望である生ける炎よ)となっています。イタリア語で“Fiamma” (フィアンマ)は「炎、(松明やろうそくのような)ともしび」の意味。私たちが「希望の光、神よ、」と歌う(祈る)神様は、蛍光灯やLEDのような冷たい光ではなく、暖かみをもつ「ともしび」であることが分かります。

答唱最後の部分も興味深いですね。「あなたを信じます。」と歌う部分の原詞は“nel cammino io confido in Te.”です。“io confido in Te.” (私はあなたを信じます。)は日本語

と同じですが、その前の“nel cammino” (ネル・カミーノ)は「道(旅路)の上(途中)」の意味。おそらく“cammino”「道」は巡礼の旅路であり、人生の旅路でもあるでしょう。この聖歌は「希望の巡礼者について歌っている」のではなく「人生の旅路にある人すべて(=希望の巡礼者)が歌う」ものなのだと思います。

詩篇の1番で興味深いのは、「すべての人を照らす。」という歌詞の「すべての人」の部分です。原詞では“Ogni lingua, popolo e nazione” (あらゆる言語、民族、そして国籍[の人々])となります。私などはよく仲間内・知っている人の総体をさして「すべての人」と言ってしまうのですが、本当に世界中の「すべての人」なのだなあと、改めて考えさせられました。

2番の最後、「いのちの霊に満ちあふれる。」と歌う部分は、原詞では“passa i muri Spirito di vita.” (いのちの霊は壁を乗り越えていく。)です。「満ちあふれる」というのは名訳だなあと感心すると同時に、「壁を乗り越える」というイメージも私たちにとって大切なのではないかとも思いました。

3番の歌い出し「目を上げ、ともに歩もう、」は、私たち信者に対する大事な呼びかけであろうと思います。この部分、イタリア語では“Alza gli occhi, muoviti col vento,” (まなざしを上げて、進もう、風[いぶき]とともに)であり、最後の“vento” (ヴェント[風/いぶき])は、もちろん聖霊を表しています。いつだって聖霊は「目を上げ、ともに歩」む私たちとともに歩んでくださるのです。

この聖歌は「同じメロディーと同じ祈りをそれぞれの言葉で、全世界で歌おう」というコンセプトらしく、公式サイトからは16言語の音源、17言語の楽譜がダウンロードできます。他の言語版もYouTubeで“Pilgrims of Hope”などと検索すればすぐ見つかります。ぜひ聴いてみていただければと思います。



ヴァチカンの公式サイト (聖年公式賛歌のページ)



“Pellegrini di Speranza” 原曲 (システィーナ礼拝堂聖歌隊による)